グローバル にいがた

世界の街から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子を紹介してもらいます。ウェブサイト新潟日報デジタルプラスにも掲載し、感想や意見、執筆希望を受け付けています。

第1月曜掲載

from デュッセルドルフ

村上 京子さん
見附市出身

「日本デー」にぎわう

デュッセルドルフは、ドイツにある16の州の中で最大の人口を擁するノルトライン＝ヴェストファーレン州の州都です。

多くの日本企業が進出し、ヨーロッパではロンドン、パリに次いで3番目に日本人の在留者が多い街でもあります。そのため、市内にあるインマーマン通りを中心としたエリアには、日本の食品や商品を多く取り扱うスーパーや書店、ラーメン店などが立ち並び、日本人のみならず多くの地元の住民や観光客でにぎわっています。

私は2020年8月にデュッセルドルフへやってきましたが、新型コロナウイルス禍の真っただ中。日常生活の規制は今よりも厳しいものでした。デパートやアパレルショップなどは休業し、営業しているのはスーパーやドラッグストアなどの生活必需品を扱う店舗だけ、という時期もありました。

勤務している日本人学校でも、オンライン授業や、登校する児童・生徒の数を半分にする分散登校など、通常とは異なる形で教育活動をしてきました。異なる学年間の交流ができなかったため、運動会などの学校行事の在り方も大きく変わりました。

しかし、現在では、マスクの着用義務がなくなるなど(公共交通機関では着用)、さまざまな場面で通常に近い形での生活を取り戻しつつあります。

そんな中、5月には欧州最大規模の日本文化イベントとも言われている「Japan Tag(日本デー)」が、従来通りの規模としては3年ぶりに実施されました。ライン川近くのメインステージでは、音楽やダンスなどの発表があり、日本人学校からも合唱部とウインドアンサンブル部が参加し、会場を盛り上げました。他にも、漫画などのポップカルチャーやグルメなどの情報・体験ブースも多く設置されており、ドイツ国内外から大勢の人たちが訪れました。

ドイツでの生活の中で、こんなに日本文化を感じることになるとは思ってもいませんでしたが、この先もデュッセルドルフと日本のつながりが続いていくことを願っています。

(村上さんは1977年生まれ。文科省在外教育施設派遣教員としてデュッセルドルフ日本人学校に勤務しています)

日本デーのメインステージ

from ロンドン

川島 章子さん
英国新潟県人会会員

貸自転車 便利で快適

「エッセンシャルワーカーの方々がソーシャルディスタンスを保ちながら通勤できるよう、一般の人はバスや地下鉄に乗るのを控えてください」

ロンドンで新型コロナウイルスの感染が拡大し、こんなお達しが出たころから、私の主な移動手段は地下鉄から自転車になりました。

ロンドンでは自転車は車道を走る規則です。内心「怖いなあ」と思っていたのですが、自転車専用道の整備が進み、比較的安心して走ることができます。

とはいえ、英国では自転車の盗難が多く、鍵をかけても部品だけが盗まれるようなこともあるので、もっぱら貸自転車を使っています。

最近はアプリを使って路上で借りたり返したりできる自転車もありますが、私が愛用しているのは、ロンドン交通局が運営する貸自転車です。ボリス・ジョンソン首相がロンドン市長の時に導入されたので、通称「ボリスバイク」と呼ばれています。

ロンドン中心部では至る所に専用無人駐輪場があり、併設の端末からカード払いで初回は30分まで2ポンド(約330円)、この後24時間以内は1回30分まで、何回でも借りることができます。30分を超えると30分ごとに2ポンドの追加料金が発生します。

端末から印刷された暗証番号を自転車の脇にあるキーパッドに入力するとロックが外れ、いざ出発! 交通局のウェブサイトで駐輪場・自転車専用道の場所を確認できるので、事前にルートを決めておけば安心です。

天気の良い日にテムズ川沿いの専用道をのんびりと走るのも爽快です。渋滞を横目に専用道をスイスイ。目的地近くの駐輪場のラックに自転車をガチャっとはめてロックのランプが点灯すれば返却終了。

以前は電車やバスで行っていたような所にも自転車で行くようになり重宝しています。難点は自転車に乗りやすい服装(ズボン、スニーカー、バックパック)優先となり「おしゃれ」が二の次となってしまったことでしょうか。

(川島さんは父と祖父母が新潟市中央区出身。1998年より英国在住、在英の日系企業に勤務しています)

ロンドンの貸自転車＝6月